

序章 津田塾大学の歴史と特色

津田塾大学は、1900(明治33)年津田梅子によって創立された「女子英学塾」を前身としている。

津田梅子は、1871(明治4)年岩倉具視大使一行の欧米視察団に同行し、米国留学の途に着き、その後、1882(明治15)年に帰国するまでの11年間アメリカ合衆国で教育を受けた。帰国時は満17歳であった。日本に戻った梅子は女性の地位の低さを強く感じ、早い時期から「男性の真の協力者にして対等の地位に立つ」自立した女性を育成する学校の設立を志した。政府からアメリカ合衆国へ派遣され、勉学の機会を与えられたことを何らかの形で社会に還元したいという強い思いもあった。この決意が津田塾大学の源流である。

その後、1885年から華族女学校で教鞭をとる機会を得た。しかし、自身の理想の実現のために高等教育を受けることを志し、1889年、再びアメリカのプリンマー大学へ留学した。3年間にわたる留学で、梅子は自らが進むべき道を再確認し、女性教育にかける思いをより具体化した。帰国後引き続き華族女学校で教えていた梅子は、1898(明治31)年には女子高等師範学校の教授も兼ねている。

翌1899(明治32)年2月には高等女学校令が公布され、また、同年8月の私立学校令により私立学校の設置が可能となった。こうした背景もあって、高等女学校の数は飛躍的に増加し、その教員を養成する女子高等教育機関の必要性が社会的な関心事となってきた。しかし、当時の女子高等教育機関は女子高等師範学校だけであった。梅子が1900(明治33)年7月に華族女学校および女子高等師範学校教授の職を辞し、私塾創設に踏み切ったのは、まさに積年の思いと社会的環境が一致した時期であった。

1900(明治33)年9月14日、津田梅子は、日本最初の私立女子高等教育機関である女子英学塾を麹町区一番町(現在の千代田区麹町)に創設した。この時の学生数は10人であったが、3年後には50人を超え、1902年には麹町区五番町へ移転している。1904(明治37)年3月には専門学校の認可を受け、同年9月には社団法人となった。1905年には、英語科教員無試験検定が許可された。

その頃から入学志願者も年々増加し、塾の拡張が検討されはじめた。当初は、五番町校地維持が前提であったが、東京市郊外の発展などもあり、移転案が浮上し、4か所の候補地から最終的に小平が選ばれた。

1922(大正11)年12月には、土地の取得と登記が完了した。

翌1923(大正12)年9月1日の関東大震災で、五番町校舎も壊滅的な打撃を受けたが、梅子の友人たちおよび卒業生の献身的な努力によって、1924年1月には仮校舎で授業を再開することができた。

小平校地を購入したものの、震災からの復旧などに追われ、また、新校舎建設の資金の調達に苦慮していたが、アメリカでの寄付などもあり、1927(昭和2)年に至りようやく新校舎の建設計画が着手された。1929(昭和4)年10月に最終的な計画が固まり、1931(昭和6)年小平新校舎が完成し、9月から授業が開始された。しかし梅子は、1917(大正6)年に体調を崩し、翌年には塾長の実務から退き、1929(昭和4)年8月16日に死去したので、この実現を見ることはできなかった。

1933(昭和8)年7月には校名が「津田英学塾」と改称された。

その後、さまざまな困難はあったものの、本学は女子高等教育機関として順調に発展してきたが、英語教育一筋に進んできた本学にとって太平洋戦争勃発は大きな試練となった。英文科志願者は、戦争直前の

1940(昭和15)年以降、減少の一途をたどったことも一因となり、1943(昭和18)年、理科を増設した。また、それを機に、創立以来冠してきた英学塾という名称を改め、「津田塾専門学校」となった。

1945(昭和20)年8月の終戦を迎え、2ヶ月後には授業が再開された。戦後の学制改革の動きに対応

して、理事会は1946(昭和21)年には新制大学としての設立の申請を行なったが、英文学部英文学科から成る新制津田塾大学の設立が認められたのは、1948(昭和23)年4月である。翌1949(昭和24)年には理科から再編された数学科の増設が認可され、学部名は学芸学部となった。

その後、1963(昭和38)年に大学院文学研究科修士課程および理学研究科修士課程を、1965(昭和40)年には文学研究科博士課程を設置するなど、高等教育機関にふさわしい体制を整えていった。さらに、1969(昭和44)年4月には、創立70周年記念事業の一環として国際関係学科を増設した。1972(昭和47)年には理学研究科博士課程、1974(昭和49)年には国際関係学研究科修士課程、1976(昭和51)年には同博士課程を設置し、現在の3学科、3研究科(博士課程・修士課程)体制が整った。

本学の特色は、次章に述べる本学の理念を反映するものであるが、以下のようにまとめることができる。

- (1) 女性の自立と地位向上に努め、男女共同参画社会の実現を目指す女性のための大学であること。
- (2) 専門を中心としつつ広い教養を培うことを基本として、社会に貢献し得る all-round women を育成すること。
- (3) 高度の外国語能力の育成を重視していること。
- (4) 学生の自主性を尊重していること。
- (5) 教員の研究もさることながら、学生に対する教育に特に重点を置いていること。
- (6) 規模の拡大にとらわれることなく、少人数教育の実施に努めていること。
- (7) 学風として勤勉・堅実・質素を旨としていること。

創立以来100余年の歴史を踏まえ、女性の自立を主たる教育目標としてきた本学は、相互評価を契機とし、教育研究の一層の充実を図り、新たな発展を期すものである。